

自然

大川山には県内では珍しい原生林が広がり、貴重な動物や植物が数多く生息しています。



ギンリョウソウ

- 4月～6月
- 別名ユウレイタケとも呼ばれます。ジメジメした薄暗い林の中でよく見かけられます。



ツルニンジン

- 10月～11月
- 花は約3.5cmで釣鐘形をしています。林の中で、つるが他の植物に絡みついているのが見られます。



チゴユリ

- 5月
- 約1.5cmの花をうつむき加減に一齐に咲かせます。林の中の地面に群生しています。



ムラサキシメジ

- 10月～11月
- 傘は約6cmで鮮やかな紫色をしています。落葉樹の林の地面より生えます。



ホトギス

- 9月～10月
- 花は約3cmです。ホトギスの胸の模様似た紫色の斑点があることからこの名がつけました。



樹氷

- 2月
- 大川山山頂の風景です。11月末頃から雪が降り、山影の積雪は春まで解けることはありません。

アクセス

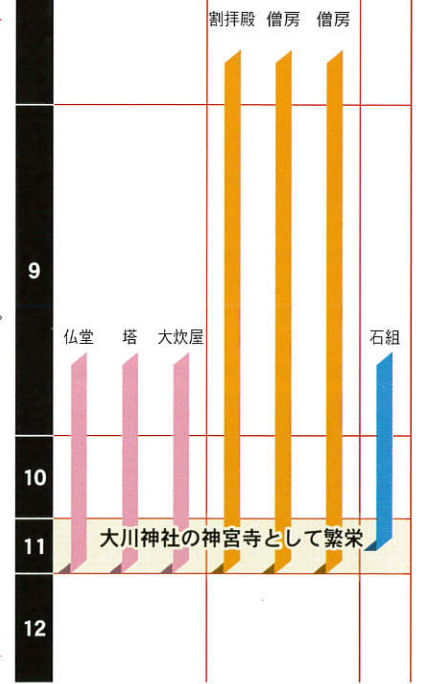


大川山からの遠景

国指定史跡
中寺廃寺跡

中寺廃寺跡は、平安時代に栄えた山寺跡です。その存在は地元の人々には伝承されていましたが、記された書物はなく、永らく幻の山寺となっていました。そこで近年、調査したところ、大川山(1042.9m)の西尾根、讃岐国と阿波国の国境近くで仏堂跡や塔跡などが見つかり、たくさんの珍しい遺物が出土しました。このことから、大きな権力を持つ山寺であったことがわかり、平成20年3月28日、国の史跡に指定されました。里から遠く離れた中寺廃寺跡は、人に荒らされることなく古代からの神秘的な雰囲気を今に伝えています。

時代	西暦	日本の出来事	郷土の出来事	中寺の様子			
				世紀	仏ゾーン	祈ゾーン	厩ゾーン
奈良	701	大宝律令が完成する。	讃岐守道守朝臣が万農(満濃)池を築く。(～704)	8			
	710	平城京に都を移す。					
	723		弘安寺(まんのう町四條)が創建される。				
	730		天川神社(まんのう町道田)が創建される。				
	732		国司が大川神社(まんのう町中通)で降雨を祈る。				
	741	国分寺、国分尼寺の造営が始まる。					
	752	東大寺の大仏開眼供養が行われる。					
	756		朝廷が聖武上皇の齋会に用いる仏具を国分寺に頒布する。				
	784	長岡京に都を移す。					
	788	最澄が一乗止観院(後の延暦寺)を創建する。					
平安	794	平安京に都を移す。		9			
	804	空海が遣唐使と共に唐に出発する。					
	805	最澄が天台宗を伝える。					
	806	空海が真言宗を伝える。					
	813		空海が普通寺を創建する。				
	816	空海が高野山に金剛峰寺を創建する。					
	821		空海が築池使別当として満濃池を改修する。				
	830		空海が神野寺を創建する。				
	835	空海が高野山にて没する。	讃岐国の税の一部を国分寺の費用に充てることが定められる。				
	886		菅原道真が讃岐守に任命される。				
888		菅原道真が降雨を阿野郡城山神社に祈る。					
894	遣唐使を停止する。						
901	菅原道真が藤原氏によって太宰府に流される。						
958		このころ尾背寺・尾背(尾瀬)神社が創建される。					
967	摂関政治が始まる。						
1020		萬濃(満濃)池後碑文が書かれる。					
1086	白河上皇による院政が始まる。						
1156	保元の乱が起こる。						
1159	平治の乱が起こる。						
1185	平氏が壇ノ浦で滅ぶ。						
鎌倉	1192	源頼朝が鎌倉幕府を開く。					



大川神社の神宮寺として繁栄

仏ゾーン 中寺の中心

9世紀～11世紀



「平安時代のたたずまい」
仏堂と塔

仏ゾーンで確認した塔跡と仏堂跡は、ともに南を向き、仏堂の正面をさけて、塔が立地しています。仏堂と塔の位置関係は讃岐国分寺の伽藍配置と相似しており、中寺と讃岐国分寺は僧侶が修行のために行来するといった関係にあったものと思われます。

仏堂・塔は計画的に建物が配置された中枢伽藍であったと考えられることから、仏ゾーンは中寺の中心的な地区であるといえます。

上段にある仏堂跡は、3間(6.7m)×2間(4.0m)で、同位置で掘立柱建物から礎石建物に建て替えられています。建物内からは10～11世紀の遺物が多量に出土しました。特に建物の奥にあたる位置からは、仏像や須弥壇に使われた鉄釘や、金具が出土し、手前にあたる位置からは、仏像を照らしていた灯明皿が出土しました。

下段にある塔跡は、3間(5.4m)×3間(5.4m)の礎石建物跡で、堅固な盛土上に礎石を配しています。塔中央の心礎石直下からは、中央に長胴甕を置き、その周囲に特注で赤く焼かれた10世紀前半の壺5個が配置された状態で出土しました。これらは塔建立の際に埋納された地鎮・鎮壇具と考えられます。

仏堂跡・塔跡より下段にある大炊屋跡は、3間(5.6m)×2間(3.6m)の掘立柱建物跡です。建物内からは食器や調理道具が出土しました。建物の床面で、竈の痕跡が確認されたことから、大炊屋跡(供物の調理施設)と考えています。



「平安時代のたたずまい」 全景

祈ゾーン 中寺の始まり

8世紀後半～11世紀



「平安時代のたたずまい」
割拝殿と僧房

祈ゾーンは東に大川山を一望できます。中寺廃寺跡の中で最も早い時期から大川山信仰に根ざす活動が行われていたと考えられます。時代を経るにつれ、割拝殿、僧房が建立されるなど、修行と生活の場としての機能が加わっていったと考えられます。大川山との関係も含め中寺の成立と展開を考える上でとても重要な地区といえます。

上段にある割拝殿跡は、5間(10.3m)×3間(6.0m)の礎石建物跡で、当時の古代山林寺院としては大規模な建物です。建物跡中央では、通路の基礎となる礎石を確認しています。割拝殿の東には広場が造成され、割拝殿から広場を見通した正面に、古くから信仰の対象となった霊峰大川山を望みます。

割拝殿跡の南斜面を段状に造成した中段と下段にある僧房跡は、3間(約5.9m)×2間(約3.5m)の掘立柱建物で、数回建て替えが行われています。僧房跡からは、当時としては大変貴重な西播磨産の須恵器多口瓶、中国越州窯系青磁碗、佐波理加盤(金属製椀)、軒丸瓦、石帯(ベルトの飾り)などが出土しました。中寺はこれらの品を取り寄せることのできる有力な寺院であったといえます。また、下段から出土した三鈷杵、錫杖は、空海らが伝えた密教より、古い特徴を持つ法具であることから、中寺の始まりを考える上で重要な資料といえます。



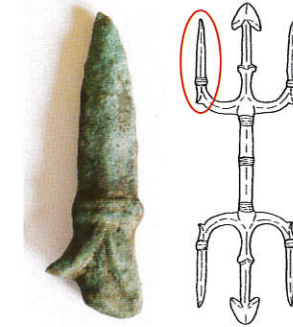
割拝殿跡(西から)



僧房跡(北西から)



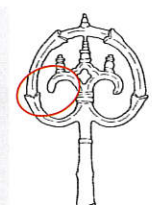
西播磨産須恵器多口瓶
上:出土状況



三鈷杵



錫杖



中国越州窯系青磁碗

願ゾーン 中寺の民間信仰

10世紀前半～11世紀

願ゾーンは仏教を信仰する一般の人々が年中行事として石組を造った地域です。この辺りは、古来より人の立ち入りが少なかったことから、平安時代に近い姿で現在まで保たれました。



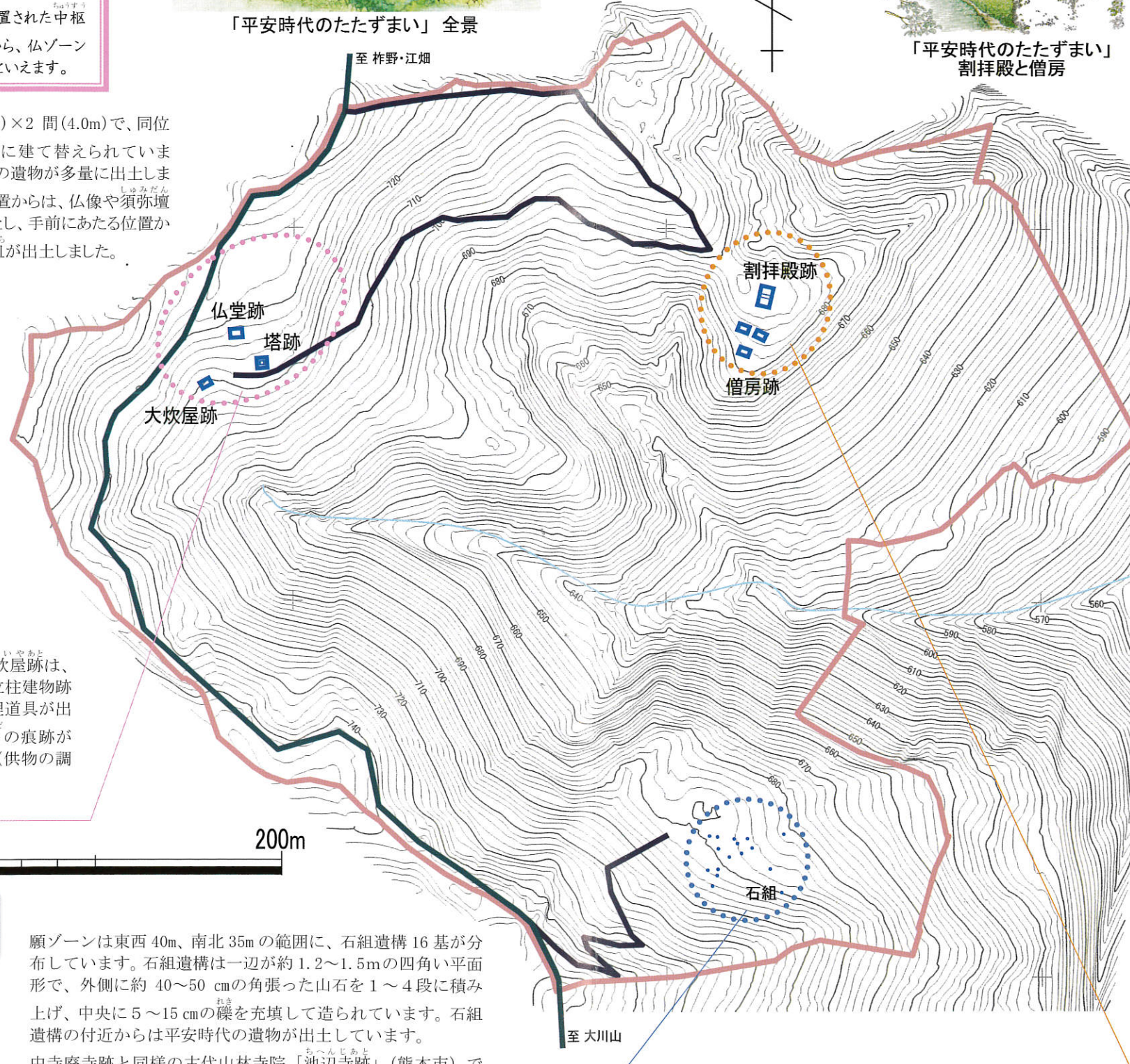
全景(南東から)



石組

願ゾーンは東西40m、南北35mの範囲に、石組遺構16基が分布しています。石組遺構は一边が約1.2～1.5mの四角い平面形で、外側に約40～50cmの角張った山石を1～4段に積み上げ、中央に5～15cmの礫を充填して造られています。石組遺構の付近からは平安時代の遺物が出土しています。

中寺廃寺跡と同様の古代山林寺院「池辺寺跡」(熊本市)でも石組遺構が確認され、石組の塔であることがわかっています。池辺寺に限らず古代山林寺院においては、寺域内に建物以外の祭祀的な空間が存在します。中寺廃寺跡の石組遺構は谷を隔てて寺院の各建物を見渡せる位置に造られており、池辺寺と同様に、中寺廃寺の一部を成す石塔であったと考えられます。また、平安時代に記された仏教行事に関する史料『三宝絵詞』によると平安時代中頃には石を積んで石塔とする行為が一般の民衆に広がっていたことが記されています。



— 史跡範囲
— 登山道
— 遊歩道



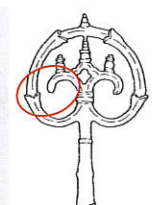
石帯(裏面)



軒丸瓦



錫杖



中国越州窯系青磁碗